

---

# Shadowing の効果と学習者の意識

佐藤 敏子  
中村 典生

---

## 1. 目的

昨今、コミュニケーション能力育成という見地から、英語の「聞く」「話す」技能の伸長が叫ばれている。その中で、特に本稿では、英語を聞いて理解する「聴解」について考える。

英語の Listening が困難である理由の一つとして、reduced form が多用される会話文の聴解が困難であることがあげられる<sup>1</sup>。reduced form の聞き取りの練習を授業の中に組み込めば、困難さの一部は解決されると思われる。

reduced form の聞き取り練習として考えられるものに、柳原（1995：73）の実験でその効果が示された、shadowing がある。shadowing とは「英語の語句や文を聞いて、間をおかずに繰り返すこと」で同時通訳の訓練でも活用されている方法である。英語を正確に聞き取り、発話するときは、英語らしいリズムやイントネーションの reproduction が要求される。聴解力の伸長のためには input とともに、output も同時に行った方が、学習者の意識の集中度は増し、効果的であると考えられる<sup>2</sup>。しかし、shadowing の効果についての分析的な研究は、上述の柳原の研究を除いてほとんどないと言ってよい。また、柳原本人も、shadowing の実験には、さらに検討の余地があることを指摘している。

柳原の研究も含め、これまでの学習効果の研究は「指導者の指導技術とその効果」という点に主眼が置かれた、teacher-centered の研究が主であったことは事実である。そこで本稿では、ふたつの実験目的を掲げることにする。ひとつは、柳原によって示された英語聴解力伸長における shadowing の効果を再検証することであり、もうひとつは、学習者の意識という student-centered の新たな観点を導入し、聴解力の伸長度が、この学習者の意識とどのような関連も持つのかということをも明らかにすることである。

## 2. 実験の方法

### (1) 対象者

4年制大学平成8年度新入生

(2) 実験計画

- (1) 4月はじめにプレ・テストを実施する。
- (2) プレ・テストの結果に基づき、実験群・統制群を設定する。
- (3) 通年の授業を行う。
- (4) 年度末にポスト・テストを実施し、聴解力の伸長度を測る。

(3) 実験群・統制群の設定

(2)に基づき、大学英語教育学会 (JACET) の開発した「英語基礎聴解力標準テスト」Form A をプレ・テストとして実施した。このテストは以下のように4つの Part に分かれており、各10問ずつ、合計40問の問題で構成されている。

- (1) Part 1--- 4つの説明文を聞き、絵や写真と合うものを選ぶ。
- (2) Part 2--- 問題文を聞いて、最も適切な答えを選ぶ。
- (3) Part 3--- 対話文を聞き、質問に対して最も適切な答えを選ぶ。
- (4) Part 4--- 短い passage を聞き、質問に答える。

(細かい内容については JACET との協定により、公開できない。)

プレ・テストの結果から設定された実験群・統制群のサンプル数、平均偏差値は表1の通りである<sup>3</sup>。( )内は標準偏差(以下SD))

表1

	サンプル数	平均偏差値
実験群	56	45.0 (9.2)
統制群	75	45.0 (7.5)

(4) 指導の手順

実験群の指導の手順は以下のとおりである。

- (1) reduced form の口頭練習
- (2) reduced form が含まれた文の dictation
- (3) listening activity (task-based)
- (4) (3) で使用した教材の parallel reading (script を見ながら)
- (5) (4) の shadowing (script は見ない)

また、統制群では、上記指導の手順の(3)のみを行う。

(5) 授業教材

授業での使用教材は『英語リダクションの演習』(小林栄智監修・三修社)と Rost, M. and Uruno, M. *Strategies in Listening* (Lingual House) である。

## (6) ポスト・テスト

12月の第2週に、大学英語教育学会 (JACET) の「英語基礎聴解力標準テスト」Form B をポスト・テストとして実施した。

## 3. 実験結果と考察

## (1) shadowing の効果について

## ① 総合結果

以上の目的、方法に基づき、行った実験の結果をまとめたものが表2である。(( )内はSD)

表2

	実験群	統制群
プレ・テスト平均偏差値	45.0 (9.2)	45.0 (7.5)
ポスト・テスト平均偏差値	50.0 (8.1)	48.3 (8.5)

プレ・テストの平均偏差値は実験群、統制群ともに45.0であるのに対し、ポスト・テストにおいては、実験群が50.0、統制群が48.3となり、実験群の方が多少ではあるが成績の伸長が見られた。

しかし、両群のポスト・テストのt検定を行ってみると、 $p = 0.41 > 0.1$ となり、両群の平均偏差値に有意な差は認められなかった。つまり、総合的に見ると、shadowing という教授法が、聴解力伸長に際だって有効であるという結果は得られなかったことになる。以下では、この結果について、もう少し詳しく検証する。

## ② 学習者の習熟度と shadowing の効果

ここでは、習熟度別の成績伸長度を分析することによって、実験の結果を検証する。

JACET では、学生の偏差値によって、上位からS・A・B・C・Dという5段階の成績評価をつけているが、これを利用し、実験群、統制群の学生をプレ・テストの結果を使い次の3群に分けた。

(1) 上位群 (成績がS・Aの学生。偏差値55以上)

(2) 中位群 (成績がBの学生。偏差値45~54)

(3) 下位群 (成績がC・Dの学生。偏差値44以下)

各群のサンプル数は次の表3のようになる。

表3

	上位群	中位群	下位群
実験群 (1) (88)	18	26	44
統制群 (1) (127)	16	40	71

次に、これら3つの群において、プレ・テスト、ポスト・テストの平均偏差値を比べてみた。それが表4である。(( )内はSD)

表 4

	実験群(1)	統制群(1)	p 値
上位群プレ・テスト	58.3 (2.9)	57.8 (3.4)	0.63
上位群ポスト・テスト	59.6 (6.0)	57.9 (5.7)	0.43
中位群プレ・テスト	49.9 (3.1)	48.2 (3.2)	0.04
中位群ポスト・テスト	50.7 (6.3)	50.7 (5.8)	
下位群プレ・テスト	38.8 (3.7)	38.7 (4.1)	0.996
下位群ポスト・テスト	46.3 (6.3)	44.1 (6.6)	0.08

上位群においては、実験群ではプレ・テスト平均が58.3、ポスト・テスト平均は59.6であり、統制群ではプレ・テスト平均が57.8、ポスト・テスト平均が57.9であった。統制群ではほとんど伸長がみられず、実験群には多少の伸びがみられたが、ポスト・テストの両群の偏差値平均を t 検定してみると、p 値が0.43となり、有意な差は認められなかった。

中位群においては、実験群・統制群間のプレ・テストの偏差値平均に有意な差 ( $p = 0.04 < 0.05$ ) が認められたため、ポスト・テスト平均の比較は行わなかった。

下位群においては、実験群ではプレ・テスト平均が38.8、ポスト・テスト平均は46.3であり、統制群ではプレ・テスト平均が38.7、ポスト・テスト平均が44.1であった。両群のポスト・テストの平均を t 検定すると p 値が0.08 ( $0.05 < p < 0.1$ ) となり、有意傾向が認められたため、実験群の方が成績が伸びているという結果が得られた。

次に、上位群・中位群・下位群それぞれについて、プレ・テスト、ポスト・テストの平均を t 検定してみた。その結果が次の表である。(数字は p 値)

表 5

	実験群(1)	統制群(1)
上位群プレ・テスト, ポスト・テスト	0.23	0.91
中位群プレ・テスト, ポスト・テスト	0.54	0.01
上位群プレ・テスト, ポスト・テスト	<0.0001	<0.0001

上位群においては、実験群の方が多少の成績伸長がみられたものの、t 検定の結果は実験群・統制群ともに  $p > 0.1$  であり、プレ・テストとポスト・テストの平均偏差値間に有意差は認められなかった。

中位群においては、実験群では  $p > 0.1$  で有意差がなかったのに対し、統制群においては  $p < 0.05$  で有意差が認められた。中位群においては、統制群の方がより成績が伸びているという結果が出た。

下位群においては、実験群・統制群ともに  $p < 0.05$  となり、有意差が認められた。(但し、表 4 で示したように、実験群・統制群間の成績の伸長を比べてみると、実験群のほうがより伸びていると言える)

当初は上位群・中位群に対しても shadowing が有効であるという予測をたてたが、表 4・5 の結果は、下位群に対してのみ shadowing が有効であることを示している。これは柳原 (1995) の実験結果とほぼ同じである。

以下では、このような結果が出たことについて、学習者の意識という観点を導入し、再度検証を試みる。

## (2) 学習者の意識と学習効果

通年の授業が終了する1月末に、実験群(1)を対象として次のようなアンケートを実施した。アンケートは質問に対して、1～5の中で、学習者の意識に最も近いものを選び、その番号に○をつけるという形式をとった。

## 現代英語Ⅱについてのアンケート

このアンケートは、今後の教材や教授法を開発するための資料となるものです。よく考えて答えてください。回答の方法は、各質問に

1. まったく当てはまらない
2. どちらかといえば、当てはまらない
3. どちらともいえない
4. どちらかといえば、当てはまる
5. よく当てはまる

1～5の番号で答えてください。ただし(12)は自由記述式です。

- |  |                                   |
|--|-----------------------------------|
| (1) 中学時代、英語は得意科目です。                            | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (2) 高校時代、英語は得意科目です。                            | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (3) 英語の4技能(「聞く」「話す」「読む」「書く」)の中で「聞き取り」は得意な分野です。 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (4) この授業は、英語の正しい発音が身につきます。                     | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (5) この授業は、英語の正しいイントネーション・リズムが身につきます。           | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (6) この授業では、英語の「聞き取り」の力が伸びます。                   | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (7) 授業の最初に行う短文の発音練習は、「聞き取り」の力の伸長に役に立ちます。       | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (8) 書き取り(ディクテーション)の練習は「聞き取り」の力の伸長に役に立ちます。      | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (9) shadowingは「聞き取り」の力の伸長に役に立ちます。              | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (10) LLの授業は興味が持てます。                            | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (11) 来年度もLLの授業を履修するつもりです。                      | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 . . . 5 |
| (12) この授業に関すること(感想・要望など)を書いてください。              |                                   |

アンケートに対する信頼度は問われるべきであると思われるが、student-centeredの研究の第一歩として、今回はまず学習者が質問(1)～(11)にどう答えたかということについて平均をとり、分析を試みた。表6が各質問に対する回答の平均をまとめたものである。

表6

質問	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)
平均	3.25	2.35	2.56	3.93	4.12	4.07	3.88	4	3.82	3.79	3.25

この結果から、次のことがわかる。

- (1) 質問(1)に対する答えの平均が3を越えていることから、本学の学生は中学時代、英語が苦手だったわけではない。
- (2) 質問(1)の平均より、質問(2)に対する平均がかなり低くなっていることから、本学の学生は高校時代に英語が苦手になっている傾向がある。
- (3) 質問(3)に対する平均がかなり低いことから、本学の学生は聴解に苦手意識を持っていることがわかる。
- (4) 質問(4)~(10)に対する回答の平均が3.5を越えていることから、実験群で行った授業方法および内容に関しては、学生たちの評価が得られていると考えられる。

次に、ポスト・テストの結果から上位群・中位群・下位群に分けて、アンケートの結果の平均をとってみた。その結果が表7であり、それをヒストグラムにしたものが図1である。

表7

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
上位群	3.42	2.33	2.83	3.79	4.33	4.04	4	4.17	3.79	4	3.46
中位群	3.13	2.26	2.59	4.05	4.1	4.21	3.9	3.92	3.85	3.69	3.38
下位群	3.27	2.55	2.23	3.86	3.91	3.86	3.73	3.95	3.82	3.73	3.73

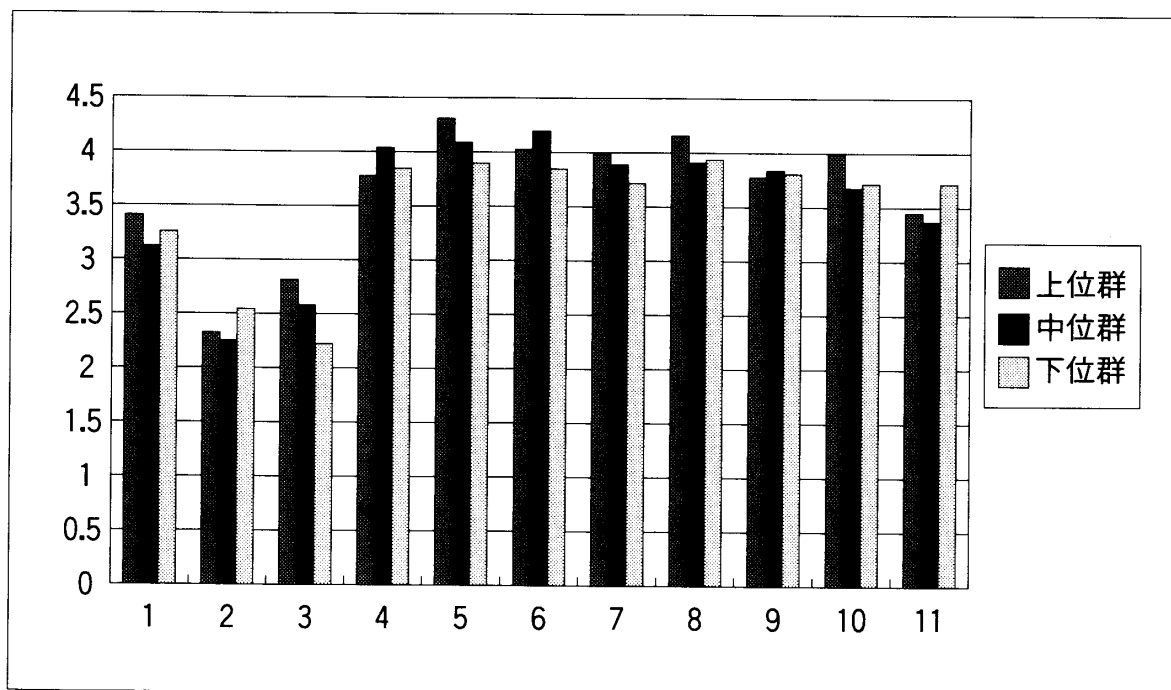


図1

以下では、特に重要であると思われる、質問(4)～(9)の結果について考察を加える。

図1をみると、質問(4)～(9)において、中位群・下位群の平均より、上位群の回答の平均が高かったのは、質問(5)「この授業は正しいイントネーション・リズムが身につきます」、(7)「授業の最初に行う短文の発音練習は、『聞き取り』の力の伸長に役に立ちます」、(8)「書き取り（ディクテーション）の練習は「聞き取り」の力の伸長に役に立ちます」、の3つである。ここでは、成績上位者が、授業で行われた練習に効果があるという実感を持っていることから、指導法として、これらが効果的であると言ってよいと思われる。(5)に関しては、学生たちがこの授業で行った shadowing などの練習が、リズム・イントネーションを身につけるのに役立つと実感していることがうかがえる。また、(7)(8)は reduced form の練習についての質問であるが、学習者はこれら reduction の練習が、聴解力伸長のために有効であると実感していることがわかる。

一方、質問(4)～(9)で、中位群・下位群の平均より、上位群の回答の平均の方が低かったのは、質問(4)「この授業は、英語の正しい発音が身につきます」、と質問(9)「shadowing は『聞き取り』の力の伸長に役に立ちます」、の2つである。質問(4)に対する回答がこのような結果となった理由としては、shadowing を行う際に、細かな語単位の発音練習を行わなかったことが考えられる。また、質問(9)の回答結果は、shadowing という音声を reproduce する練習法が、いつのまにか音声を聞き取る力の伸長につながるということが、学習者には意識されにくいということを示しているように思われる。実際、表6を見てみても、質問(9)に対する回答の全体平均は3.82であり、3.5を越えてはいるものの、質問(4)～(9)の中では最も低くなっている。これより、今後の指導の留意点としては、学習者が shadowing は、聴解力の伸長に効果的であるという意識を強く持てるような指導をするべきであると思われる。

次に、ポスト・テストの偏差値が、プレ・テストの偏差値から、10以上伸びている学生（17名）を達成群、逆に偏差値が下がっている学生（21名）を未達成群とし、質問(4)～(9)に対する回答の平均をとってみた。その結果が表8であり、それをヒストグラムにしたものが図2である。

表8

	4	5	6	7	8	9
達成群	4.24	4.06	3.53	3.88	3.53	3.29
未達成群	4.14	4.19	4.05	3.95	4.1	4

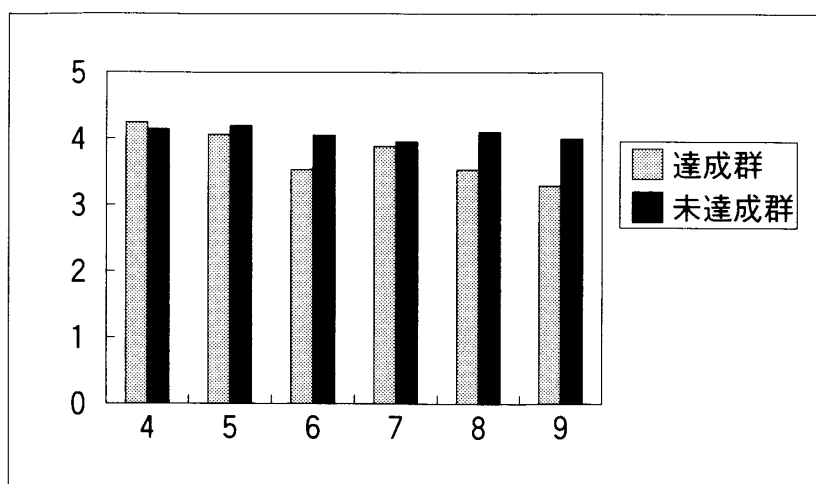


図 2

また、達成群、未達成群のプレ・テスト、ポスト・テストの平均偏差値、およびそれぞれの群における偏差値の平均伸長度は、表9のようになっている。

表 9

	プレ・テスト	ポスト・テスト	平均伸長度
達成群(17名)	39.06	51.94	12.88
未達成群(21名)	50.67	46.05	-4.61

ここでは非常に意外な結果が出た。予想では、達成群の回答平均の方が高くなると思われたが、実際、達成群が未達成群を上回ったのは質問(4)に対する回答のみであった。特に、質問(9)に関しては、達成群の回答平均が未達成群の回答平均を大きく下回っている。つまり、聴解力の伸長が認められた学生が、本授業が聴解力伸長に役立つ授業であると考えていないという結果が出たわけである。

結論からいえば、この結果に関しては、現在のところ説明することは不可能である。ただ、考えられることとしては、表9からわかるように、達成群のプレ・テストの平均偏差値は40を切っており、かなり低いことがある。つまり、達成群のほとんどがプレ・テストでは下位群に属する学生たちであり、成績が伸びても上位群にまで到達するような学生がほとんどいなかったことがわかる。この、個人としては成績は伸びたが、全体の中で位置づけると、決して成績が上位になったわけではないという事実が、結局、表8・図2のような結果につながったと考えることができるかもしれない。しかし、いずれにせよ、以上のアンケート結果に関する考察は、学習者の意識に係わる問題なので、今後、もっと詳細なデータをとって調べてみる必要があるように思われる。そのひとつの方法として、習熟度別クラス編成の導入が考えられる。習熟度別に授業を行い、詳細なデータをとることができれば、何らかの事実が明らかになる可能性があると思われる。

また、本実験の問題点としては、実験の手順と教材の問題が考えられる。今回の実験において、教材の選定や、指導の手順に関する考察が欠けていたことは否めない。shadowing の手順としては、



3章で示したように、(1) reduced form の口頭練習、(2) reduced form が含まれた文 dictation、(3) listening activity (task-based)、(4) (3)で使用した教材の parallel reading (script を見ながら)、(5) (4)の shadowing (script は見ない) という手順をとった。しかし、例えば、(3)から(4)の作業に移行する場合、細かな語の練習等を行わずに parallel reading に移ることに、無理がなかったかなどは考えるべき問題であろう<sup>6</sup>。また、教材に関しても、学習者が音声と意味との対応をとるという意識を持ちにくい<sup>7</sup>、早口言葉的な教材もあったように思われるし、また、ビデオ教材の方が音声教材よりも shadowing に適しているという考え方もある。既に1章で述べたように、shadowing の指導、教材に関する研究は、今のところ非常に少ないので、今後は手順・教材の検討も含めて、研究を行う必要があるように思われる。

#### 4. 結論

1996年度に行った実験とアンケートの結果、以下のことが明らかになった。

- (1) shadowing という練習法は、学習者の習熟度別にみると、上位群・中位群に対しては際だって有効な練習法であるとは言えない。
- (2) shadowing という練習法は、学習者の習熟度別にみると、下位群に対して非常に有効な練習法である。
- (3) reduction の練習は、学習者にとって、聴解力伸長のための有効な練習法であると捉えられている。
- (4) shadowing は、学習者にとって、リズム・イントネーションを身につける有効な練習法であると捉えられている。
- (5) shadowing は、学習者にとって、聴解力伸長のための際だって有効な練習法であるとは捉えられていない。

また、以上の結果・考察をふまえると、問題点として次のことがあげられる。

- (1) shadowing の手順と教材の検討。
- (2) 学習者の意識と学習効果の関係を明らかにすること。

これらは今後の研究課題としたい。

#### 注

1. 詳しくは佐藤・中村(1996:94-104)を参照
2. 竹蓋(1984)は、聴解を科学的に検証し、聞き取りとは、授受した音声の統語構造を分析したり、既知の語のリストと照合したり、意味と対応づけたりといった、様々な作業を同時並行的に行う総合的行動であり、聴解力伸長はこの並行処理をより円滑に行うことが出来るようになることであるという考えを示している。また竹蓋は、発話時にも聞き取りの際に行う作業と非常に近似した並行処理が行われていると述べている。この竹蓋の見解をふまえると、input と output を同時に行う shadowing は、脳内での連続的な並行処理を促すと考えられ、聴解力伸長の助けとなると考えられる。

しかし、注意すべき重要な点は、単に音を聴いて模倣するだけで、音声と意味との結びつきを意識できないと、shadowing としての意味をなさないということである。我々が日常、何ら

かの発話をする場合、必ず意味が結びついている。したがって、shadowing を授業に取り入れる場合、練習中にたえず shadowing している文の意味を考えながら練習する必要があるように思われる。指導者もこの点には十分注意を払う必要がある。

3. 当初、実験群88名、統制群127名（計8クラス）に設定しようとしたが（実験群(1)、統制群(1)とする）、プレ・テストにおける実験群・統制群の平均偏差値がそれぞれ47.5、44.1、となり、両群の平均偏差値間に有意傾向（ $P=0.09<0.1$ ）が認められたため、群の再設定を行った。その再設定したサンプル数、平均偏差値が表1に示されている。
4. 表3の実験群・統制群のサンプル数に関しては注3を参照。
5. このことは、表4で、下位群の学生の成績伸長が、上位群・中位群に比べて非常に顕著なことから推論できる。
6. 表7の質問(4)に対する回答も参照。
7. 注2を参照。

（さとう・としこ 産業情報学科）

（なかむら・のりお 産業情報学科）

#### 参考文献

1. 清川英男 1990.『英語教育研究入門』 大修館書店.
2. 小林栄智・Richard Linde (監修) 1995. *Practice in English Reduced Forms*. 三修社.
3. 小池生夫監修 1994.『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店.
4. Larsen-Freeman, Diane and Long, M.H. 1991. *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. Longman.
5. White, Lydia 1989. *Universal Grammar and Second Language Acquisition*. John Benjamins Publishing Company. 千葉修司・ケビン・グレッソ・平川真木子(訳)1992.『普遍文法と第二言語獲得』リーベル出版.
6. 文部省 1993. 中学校外国語指導資料『コミュニケーションを目指した英語の指導と評価』開隆堂出版.
7. 新里眞男 1992.「H.E.Palmerの指導法とその現代性」『筑波大学学校教育部紀要』第14号.
8. Ur, Penny 1984. *Teaching Listening Comprehension*. Cambridge University Press.
9. Rost, M. and M. Uruno 1995. *Strategies in Listening* Lingual House.
10. 佐藤敏子・中村典生 1996.「つくば国際大学生の英語聴解力調査 - JACET基礎聴解力標準テストを使ったデータ分析-」『つくば国際大学研究紀要』vol. 3, 93-106.
11. 竹蓋幸夫 1984.『ヒアリングの行動科学』研究社.
12. 田中敏・山際勇一郎 1994.『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版.
13. 田崎清忠 1995.『現代英語教育法総覧』大修館書店.
14. 植村研一 1996.「脳から見た外国語教育」語学ラボラトリー学会第36回全国研究大会講演資料.
15. 柳原由美子 1995.「シャドウイングとディクテーションの効果について」*Language Laboratory*, vol. 32, 73-90.

## The Effects of Shadowing and the Students' Feedback

Toshiko Sato  
Norio Nakamura

Our concern is to examine the efficiency of shadowing-oriented teaching approach and analyze the learners' feedback.

The procedure for this paper is as follows:

- (1) We conducted a teaching experiment to find the most effective method of developing listening comprehension ability; the students of control group took lessons focusing on task-based activities, and the others of experimental group took ones focusing on the shadowing-oriented method.
- (2) JACET Listening Comprehension Test Basic Form A was given in April as the pretest and Basic Form B was in December as the posttest.
- (3) The results and the learners' feedback were analyzed.

The following results were obtained:

- (1) The shadowing-oriented teaching approach was effective for slow learners to develop their listening comprehension ability.
- (2) It seemed to the students that the practice of reduction was effective to develop their listening skill.
- (3) It seemed to them that the shadowing method was effective to obtain the rhythm and intonation of English.
- (4) It did not seem to them that the shadowing method was the most effective for developing their listening comprehension ability.

**Key words:** Shadowing, Listening Comprehension, Reduced Form, Reduction, JACET Listening Comprehension Test